毎日子供に物語りを

アメリカの言語心理学者、プリマック夫妻は、赤ちゃんが生まれるとすぐ、赤ちゃんと同じ頃生まれたチンパンジーを買い取り、これを着物から食べ物に至るまですべて自分の子と同じにして育てました。

つまり、チンパンジーを自分の子と双子の兄弟のようにして育てたのです。初めは、チンパンジーの方が兄さんのようで賢そうにふるまっていましたが、赤ちゃんがプリマック夫妻の語りかける言葉を覚えてこれを真似るのに、チンパンジーの方はそれが全く出来なかったということです。

それで、初めはチンパンジーより幼稚に見えた赤ちゃんが、言葉を覚えてこれを使うようになると、たちまちにチンパンジーより賢くふるまうようになったということです。

この実験で、「言葉を覚えてこれが使えるのは人間だけである」ということ、「言葉を覚えてこれを使うことにより、人間は知識を高め、賢い行動が出来るようになる」ということが証明されたのです。

だから、子供を賢い子にしたかったら、赤ちゃんのうちから、出来る限り言葉をかけてやることが大切だ、ということが言えます。ところが実際には、赤ちゃんを出来る限りはほって置こうとする親が少なくありません。

それで、赤ちゃんが独り遊びをするようだと、「手が掛らないで良い子だ」と喜んでいるようですが、これでは言葉を覚えることが出来ず、従って知能の発達が妨げられ、その上、何より大事な人間関係を作っていくための基礎作りが出来ないことになります。

幼稚園で、友だちとうまくやっていけない子、先生のお話に耳を傾けられない子というのは、親に会って話し合ってみますと、ほとんどが口を合せたように「独りでよく遊んで手のかからない良い子だった」と言っています。

いかに独りでよく遊べるからと言って、ほって置いたのでは、“人”は“人間”になれません。人の“間”に置かれて、顔を合わせ言葉を交わして初めて“人間”になれるのです。それまでは、動物学的な“人”に過ぎないのであって、万物の霊長たる“人間”ではないのです。

前項でも申しましたように、過保護はいけませんが、人間の子は親の保護が絶対に必要なのです。親の口から発せられる言葉を耳にし、それを真似ることによって言葉を覚え、人間の心を養い育てているのです。

昔は、赤ちゃんの周囲にはいつも人が大勢集まり、声をかけたものです。だから、皆、人間らしい人間になることが出来ました。ところが今は、核家族と呼ばれる小家族のため、赤ちゃんは人間の声を聞く機会が少なくなりました。

親と子の楽しい思い出をつくろう

それだけに、昔よりも一層親の責任が重くなったわけです。独りで遊んでいるから良い、と考えないで、出来る限り子供の相手になってやるべきです。親としてそれは何よりも大事な仕事であって、楽しい仕事のはずです。親子のこうした営みは、子供が成人しても心温まる思い出となり、親としても楽しい思い出となります。

また、こういう思い出を胸にもつ子供は、決して親に暴力を振うこともなく、非行に走るようなこともないと思います。

たとえ一時的にそういうことがあったとしても、楽しい親子の睦み合った記憶が子供をきっと立ち直らせてくれると思います。

さて、三歳から四歳にかけての一年間を、学問的に“言語の成熟期”と呼び、この時期に最も目ざましい発達をしますので、親子の語らいばかりでなく、童話や物語りを読み聞かせる必要があります。

“猿蟹合戦”や“カチカチ山”などの昔話は、意地悪をしてはいけないこと、親切や思いやりの大切なことを、知らず知らずのうちに子供の心にはぐくんでくれます。

とりわけ、母親の口から語られるこういう物語りは、テレビなどよりもずっと子供の心にしみとおり、子供もまたそれを大いに求めるものです。それは話の上手下手によりません。

また、子供は、気に入った話は何回でも聞きたがるものです。毎日、二回三回とくり返し聞いても決して飽きる様子がありません。親の方はくり返しが苦痛ですが、子供にはこのくり返しが必要なものですから、努力して子供の求めに応ずべきです。

そうしてやりますと、子供はすっかり物語りの全体を覚えてしまいますが、それでも親の口からそれを聞きたがって止みません。うっかりちょっとでも間違えますと、即座に「違う」と言ってその間違いを訂正します。

そこまでやることが大切なのです。そこまで行って完全に消化できたと言えるのであって、それが子供の能力を著しく育てるのです。と同時に、それが温かい親子関係を作り、それが親子を結びつける強い絆となるのです。